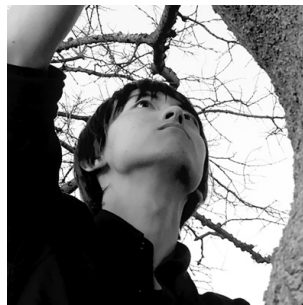


令和7年度 金沢美術工芸大学大学院 博士 1,2 年合同研究発表展

Artist Profiles



新藤 美希

Shindo Miki



～略歴～

1998 富山県 生まれ

2021 富山大学芸術文化学部芸術文化学科造形芸術コース 卒業

2024 金沢美術工芸大学大学院修士課程絵画専攻日本画コース 修了

現在 同大学大学院博士後期課程美術工芸専攻日本画分野2年 在籍

自分だけの理想郷である「非在郷」をテーマに日本画を制作しています。非在郷は、私の理想を詰め込んだ現実には存在しない世界であり、日常生活や現代社会から一旦離れ、再び前向きに生きるための活力を養う拠り所です。人物や植物をメインに、画面を構成しています。博士課程では、非在郷の世界観を構築し独自の日本画表現として展開するために、極楽浄土や理想郷に関連の深い「阿弥陀来迎図」（浄土教絵画の主題の一つ）を中心に、理想郷の研究をしています。思想面では浄土思想やユートピアについて学び、制作では現状模写や絵具の劣化検証実験を通して来迎図に描かれる来迎雲（阿弥陀聖衆が乗る雲）の表現を追求しています。自作品の重要な表現として波のような曲線模様があり、非在郷を漂う良い流れや“めでたさ”の象徴として描いていますが、これは来迎雲を参考にしています。これによって理想郷としての幻想性や神秘性を高めながら、風や温度、香りなどの目には見えないものの表現を試みています。そして最近では、非在郷の時間や場所などの世界観を構築する上で、富山で生まれ育った私にとって特別で理想的な季節である春と冬の季節感が重要であると考え、そのイメージが感じられるような作品の制作を心がけています。

武 超

Wu chao



～略歴～

1993 山西省 生まれ

2017 山西師範大学美術学院油専攻修士課程油画コース 修了

2024 金沢美術工芸大学大学院修士課程油画コース 修了

現在 同大学大学院博士後期課程油画分野 2 年 在籍

「部分と全体の相似性」を軸に、細胞・人間・宇宙・社会のあいだに潜む構造的な呼応を探究している。

宇宙をひとつの生命体として捉え、細胞の分裂や死を星の誕生と崩壊に重ねる。ダークマターと脳神経のネットワークの相似性を手がかりに、ミクロとマクロが共鳴する構造を描き出している。道教の「天人合一」やフラクタル科学の視点を交差させ、世界が自己相似的に生成し循環する姿を探る。土、灰、植物、木、鉄、砂などの天然素材を用い、五行思想に基づく循環的な制作を行う。素材に宿る時間や記憶を読み解きながら、生命の誕生と死、再生と調和を可視化することを試みている。

近年は、現代中国の社会現象「寝そべり族（躺平主義）」にも焦点を当て、過剰な競争社会に対する静かな抵抗と、沈黙の中に潜む新たな主体性を見出している。

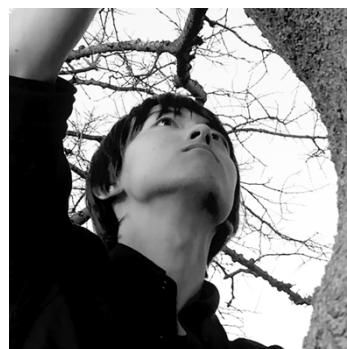
作品を通じて、生命・宇宙・社会の循環構造を再構築し、存在そのものが持つ“静かな力”を浮かび上がらせることを目指している。

近年の作品に、宇宙に存在するダークマターの分布と脳細胞ネットワークの相似性に着目し、それが「天人同一」の考えを呼び覚ます記憶かもしれないという想像的仮説を表現した《ダークマター-細胞の中の記憶-》(2023、KANABI クリエイティブ賞 2023 卒業・修了制作部門学長賞)。卵細胞のうちに混沌の中から人間の形が形成される不思議な現象の神秘性に焦点を当てて表現した《卵細胞》(2024、全国漆喰鏝絵コンクール展新人賞)がある。《空から始まり》(2025、第7回フレスコ展フォルム画廊賞)。主な展覧会に中国当代油画系列招待展(2016、太原/中国)。

中国山西省油絵協会会員、中国山西省女性芸術家協会会員、日本フレスコ普及協会会員。

田中 宏和

Tanaka Hirokazu



～略歴～

1998 岐阜県 生まれ

2022 金沢美術工芸大学美術工芸学部彫刻専攻 卒業

2024 同大学大学院修士課彫刻専攻 修了

現在 同大学大学院博士後期課程彫刻分野2年 在籍

ケアは人間だけの問題なのか？

私は、物や空間に対するケアについて研究をしています。

今回は物についての展示です。

私自身、その存在に気付かずに見過ごしてしまったり、感情に任せて扱ってしまったりする物があります。それらは透明な物だったり、小さな物だったり、処理が面倒な物だったり、思い通りに扱えない物だったりします。

人間と物との関係性は一方向的・支配的になりやすいのかもしれませんが、ですが、この文章を読んでいる貴方と同じように、彼らもまた、この世界に存在しています。

私は、そうした物を「あなた」と捉え直し、なぞります。「あなた」にそっと合わせるように、「あなた」を確かめるように。その静かな営みの中で、「あなた」というたったひとつの存在である物を、物そのものとして立ち上げようとしています。

この世界の全てのものを等しくまなざすことは不可能です。何かをまなざす時、まなざされない何かが生れます。だから私は、今までまなざされ得なかったものを眼差してみたいのです。そしてどのような質の眼差し方ができるのかを検討したいのです。

貴方はどうでしょうか？貴方自身が生きる世界で、貴方は何をまなざし、それとどのような関係を紡ぐのでしょうか？

張 揚

Zhang yang



略歴

1996 中国山西省生まれ

2018 中国四川美术学院大学中国画学部 卒業

2023 金沢美術工芸大学大学院修士課程漆・木工コース 修了

現在 同大学大学院博士後期課程漆芸分野 2 年 在籍

私は、漆器を制作している。中国文化に伝承される昔話の中で、自身が感動し、享受したメッセージを漆絵の題材とし、漆器という表現を通して現代人に「人間性は脆弱であり、そして可変的である」という世界観を伝えることが、制作テーマである。

そのテーマにおいて、物語絵のある中国画やペルシア細密画の絵画表現を研究・応用しつつ、昔話の登場人物の表情や動作、またその情景や物語を漆絵として具体的かつ表情豊かに描き出すことが重要なコンセプトとなると考えている。同時に、その題材に合わせた漆器の形態を造形することも、もう一つの重要な柱である。加えて、漆器を単なる実用品ではなく、芸術性と趣味性を兼ね備えた表現媒体と捉え、漆絵の表現力向上と造形との融合を通じて、多面的な可能性を探求している。

荒木いちご

Ichigo Araki



～略歴～

1995 滋賀県生まれ

2023 金沢美術工芸大学 美術工芸学部工芸科陶磁コース 卒業

2025 金沢美術工芸大学大学院 修士課程 工芸科陶磁コース 修了

現在 金沢美術工芸大学大学院 博士後期課程 陶磁分野1年 在籍

「現代的な視点を取りいれて、陶表現による縁起物の制作と研究に取り組んでいる。縁起物とは、招き猫や破魔矢、おせち料理や鏡餅など、縁起を担ぐことのできる物品や行事の全般のことである。古くからある縁起物が形骸化することのないように、縁起物の要素や吉祥文様などを取り入れつつも、独自のデフォルメや技術を用いて、観る人が楽しく、かつ共感できる新しい縁起物を創出することを目指している。素体は主に型起こし技法を用いてつくり、釉薬をかけて焼き上げた後、上絵によってポップでユニークな印象になるようにしている。

王 一帆

Wang Yifan



～略歴～

1998 中国湖北省 生まれ

2020 湖北美術学院 卒業

2025 金沢美術工芸大学大学院修士課油画コース 修了

現在 同大学大学院博士後期課程油画分野一年 在籍

私の研究テーマは「記憶の表現と平面空間構成の関係」です。私は個人記憶と集合記憶がどのように絵画や空間において表現されるのかに注目し、その表現が地域性や社会性とどのように結びつくのかを考察しています。理論的には、アルヴァックスの「集合記憶」やメルロ＝ポンティの「身体－空間」などの思想を参照しています。

制作においては、油彩、ガラス、自然物などの素材を用い、線の表現力を強調し、それを記憶対象との情動的なつながりを生み出す媒介としています。また、ガラスの透明性や不確定性を通じて、記憶の脆弱さや変動性を表現しようとしています。湖北省の山林や河川での原風景と、現在生活している金沢の自然環境が、私の作品に一貫して影響を与えています。これらの実践を通じて、私は記憶がどのように平面の中で表現され得るのかを探究し、さらに個人と社会、過去と現在の間に対話を成立させたいと考えています。

劉 天愷

Liu Tiankai



～略歴～

1999 中国広東省 生まれ

2021 中国中央美術学院 卒業

2025 金沢美術工芸大学大学院修士課程工芸専攻陶磁コース 修了

現在 同大学大学院博士後期課程美術工芸専攻陶磁分野1年 在籍

私は陶磁素材を用い、「微視的生物構造」と「器」をテーマに制作を続けています。微視的生物構造とは、植物の孢子嚢や粘菌など、普段は見過ごされがちな小さな生命の構造を指します。枯れや病を抱えながらも再生するその姿は、単なる美しさを超え、異質性を含んだ生命の強さを象徴します。

こうしたモチーフに注目するきっかけは、中国民国期の吉祥文様の研究でした。そこに潜む「男尊女卑(だんそんじょひ)」といった価値観を知り、自然の美を借りた表現が時に自分が理解できない意味を帯びることに気づきました。以後、現代的な視点から新しい生命力の表現を探す中で、身近な微視的構造に魅力を感じるようになりました。

陶磁は元来有機的な素材であり、粘土の可塑性や焼成による変化は、生物の孵化や環境適応の過程と重なると感じます。釉薬の流れや発泡など、作品に生じる「逸脱」を作品に取り込み、自身を囲む全体の規範から外れる存在の象徴として表しています。

また「器」は私にとって単なる実用品ではなく、全体とその規範を象徴する枠組みです。安定を備えた器の形態は規範を示し、そこから逸れる欠陥や変形は異質性のメタファーとなります。修了制作「朽ちゆく殻の内側から」は、蕾や殻のように生命を内包する形を新たな器像として捉え、個と全体の関係を表現する方向へ展開しています。

博士課程のこれからの研究では、実験的な試作と理論的研究を重ね、器と微視的生物構造の関係を探ることで、陶磁表現の新たな可能性を開いていきたいと考えています。

三澤 直加

MISAWA Naoka



- 1977 長野県安曇野 生まれ
- 2000 金沢美術工芸大学 美術工芸学部 製品デザイン専攻 卒業
- 2000 株式会社 U'eyes Design 入社
デザインリサーチャー／UX デザイナー／ファシリテーターとして活動
- 2011 株式会社グラグリッド 設立 （代表取締役）
サービスデザイナー／ビジョンデザイナー／コンサルタントとして 現在も活動中
- 2025 金沢美術工芸大学大学院 博士後期課程 環境造形デザイン分野 在籍

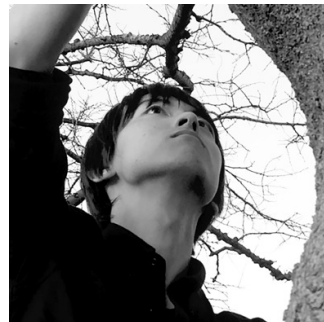
企業・行政・教育など、多様な領域で 20 年以上にわたり、「未来を構想する」実践に携わってきた。事業開発やビジョン策定の現場では、デザイナーとしてモノを生み出すだけでなく、その背景にあるビジネスのしくみや組織のあり方までも支援の対象としてきた。その過程で培われた、絵や図を描きながら考える「ビジュアル思考」は、組織における個性の発見や企画力の向上に大きな成果をもたらしている。

こうした経験を通じて感じたのは、多くの人が「正しく課題を解く」ことに慣れすぎて、「未知の世界を描く」勇気を失いかけているという現実だった。人や組織が未知のものと向き合い、創造性を発揮するためには、その根底にある「創造への確信」を育むことが欠かせない。この“創造の核”を理論的に捉え直すべく、実務の第一線から研究の世界へと舵を切り、博士後期課程に進学。現在は、実務と研究を往還しながら、人や組織の創造性を解き放つためのデザインのしくみを探究している。

著書『正解がない時代のビジョンの作り方』、『ビジュアル思考大全』（翔泳社）など
武蔵野美術大学 および 金沢美術工芸大学 非常勤講師
HCD-Net 認定 人間中心設計専門家、日本デザイン学会 会員



上：新藤 美希（日本画） / 武 超（油画・インスタレーション） / 田中 宏和（彫刻） / 張 揚（漆芸）
下：荒木 いちこ（陶磁） / 王 一帆（油画・ミクストメディア） / 劉 天愷（陶磁） / 三澤 直加（デザイン・思考法）





博士前夜 -問いがカタチになる前に-